2018年
8月9日(木)
第11号

# ナガサキ ピース・タイムズ

NAGASAKI PEACE TIMES　非核協おやこ記者新聞

発行者【PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
（にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい）
〒852-8117 長崎市平野町7番8号
長崎市 平和推進課内
電話 095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail info@nucfreejapan.com
ホームページ http://www.nucfreejapan.com

# ナガサキが教えてくれた、大事なこと。長崎からわたしから世界へ

## ～被爆73年目を迎えて～

2018（平成30）年8月9日、長崎は被爆73年目の暑い夏を迎えました。
今年は「ナガサキが教えてくれた、大事なこと。長崎からわたしから世界へ ～被爆73年目を迎えて～」をメインテーマに、
全国から集まったおやこ記者9組18名が、長崎の平和継承活動や取り組みを取材しました。【編集部】

## アートで平和を発信

### ―福島から長崎そして世界へ―

長崎歴史文化博物館で開催されている「おきあがりこぼし展」の実行委員長・内田秀行さんと長崎平和アートプロジェクト「ナヘア」の事務局長・林田英昭さんに話を聞きました。この「おきあがりこぼしプロジェクト」は2013年にデザイナーの高田賢三さんがアーティストに呼びかけ始まりました。福島県の伝統民芸品おきあがりこぼしに絵付けをしてもらう活動です。昨年、広島県での開催時に田上富久長崎市長が絵付けした作品が展示されたことをきっかけに、今年長崎市で初めて開かれました。アートで平和を発信するナヘアの活動の一環として市内4会場合わせて700点が展示されます。内田委員長は「楽しくなることが平和につながる」と話してくれました。私はこのおきあがりこぼし展が世界中に広がればいいなと思いました。

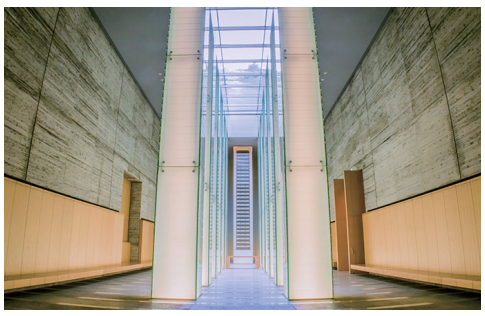
［杉原 編・輝美記者］

展示中のおきあがりこぼし

林田英昭さん（左）と内田秀行さん（右）

上段の真ん中は田上富久長崎市長の絵付け

# 戦争を繰り返さないために
## ―次世代へのメッセージ―


追悼平和祈念館の追悼空間

館長の黒川智夫さん

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の館長・黒川智夫さんを取材しました。追悼平和祈念館では、原爆に遭われた方の手記や、亡くなった方の遺影を集めて保存する仕事をしているそうです。原爆に遭われた方には、自分の体験を忘れたいという人が多いので館長は心苦しいそうです。原爆の被害について説明してくれたなかで、ケガや病気だけでなく、精神的な苦しみで自殺してしまう人もいたという話が心に残りました。

「原爆はタイムマシンで突然現れたのではない」という話もしてくれました。戦争があったせいで原爆が落とされたことを忘れずに、なぜ戦争が起きてしまったのか、戦争をしないためにはどうすればいいかを考えていきたいです。

［山中 里紗・亜由美記者］

「被爆者歌う会ひまわり」による合唱で祈念式典は始まりました

# おそろしい戦争
## ―花の前に水をたむける―

ぼくは、長崎市の平和祈念式典に参加しました。そこで初めて知ったのが献水です。普通の式典では、花をたむける前に水をたむけるけれど、花をたむけていました。それには理由があり、被爆した人が「水を、水を」と、うめきさけび死んでいったので、水もたむけるのです。これは広島の祈念式典でも同じことをしています。

献水用の水は、長崎市の東西南北と中央の、泉や井戸の清らかな水をささげています。

水を見るたびに、ぼくは戦争のことを思い出し、未来の世界を平和にしたいし、苦しんで亡くなった人の分までつらい過去をむだにせず、未来の人々に伝えていきたいです。

【安田 宗市・和日子記者】

亡くなられたかたに、水をたむけました

「平和の泉」の水をささげました

# あの日を忘れない「平和のちかい」
## ―稲佐小学校を訪ねて―

ぼくは長崎市立稲佐小学校の平和祈念集会に行きました。夏休み中の登校日で、全校児童約250人が参加しました。

平和学習では2年生、3年生、5年生がそれぞれ発表しました。2年生は「けんかをしても優しくごめんねと言います」と宣言しました。3年生は「戦争は人殺しの道具です」と言っていました。5年生は全校児童のアンケートを行ったところ、原爆の日を知っている人が全体の54％と低かったので、低学年にもわかりやすい劇にして説明をしました。

その後、5年生の森本高史さんと服部羽奏さんに平和について聞きました。森本さんは平和とは「みんなが願う夢」。服部さんは「みんなの命を大切にすること」と言っていました。

ぼくは、稲佐小の児童が真剣に平和について考える姿を見て、ぼくも友達と真剣に平和について話したいと思いました。

［斉藤昂太郎・佳世子記者］

集会では、千羽鶴をささげました

# 染谷さんから聞いた平和への思い
## ―歌を通じて伝える大切なもの―

ぼくは、ロックバンド「FUNKIST（ファンキスト）」のボーカルで、サッカークラブ「V（ヴィ）・ファーレン長崎」の自作の応援歌を歌っている染谷西郷（そめやさいごう）さんに話を聞きました。

染谷さんは、国際結婚の両親のもとに生まれ、10代のころ海外で生活されていました。その時、日本の戦争のことを聞かれたのに、全く答えられない自分にショックを受け、それをきっかけに戦争のことを深く考えるようになったそうです。

20代前半に沖縄や広島、長崎を訪れて多くのことを知り、平和を実感できる笑い合える今の大切さを、音楽を通じてこれからも伝え続けていきたいと言われていました。

「私はアメリカ人がきらいではなく、原爆を落としたアメリカが嫌いだ。」という染谷さんの言葉がなんとなく心に残りました。取材を通じて、みんなが平和について真剣に考え、国同士が争いをしないように、一人ひとりが行動していくことが大切だと感じました。

【温井颯真・由美子記者】

染谷西郷さん

# 三瀬清一朗さんの話を聞いて
## ―当たり前のことを大切に―

8月9日、被爆体験講話者の三瀬清一朗さんから、戦争中の話を聞きました。戦争中は、食料がなく毎日かぼちゃばかり食べていたそうです。ニワトリを絞めて食べたことがあるそうですが、そのことを思い出してしまい、今も鶏肉を食べられないそうです。私は、お肉は食べるけど、野菜を残してしまうことがあります。普段、当たり前にある食べ物も戦争中にはなかったということを知り、これからは平和だからこそ何不自由なく生活できているということに感謝し、ご飯粒も残さないようにしようと思いました。

三瀬清一朗さん

三瀬さんの「平和とは、明日があるということ」という言葉を忘れずに生きていこうと思います。

［山中 里紗・亜由美記者］

# 被爆3世が伝えたい思い
## ―今、しなければならない―

松永瑠衣子さん

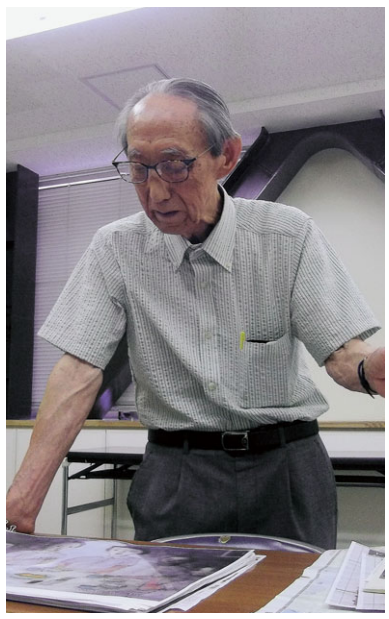
私は、作家の松永瑠衣子さん（26歳）に話を聞きました。松永さんは、語り部である下平作江さんと、原爆のことを一度も話したことのない松永さんのおばあちゃんに話を聞き、本にするそうです。本は来年の夏に出版予定だそうです。

松永さんが2人の被爆体験を継承する本を書きたいと思ったきっかけは、昨年亡くなられた被爆者の谷口稜曄さんが、松永さんに「平和のバトンをあなたに」と言ってくれて、平和の大切さを教えてくれたことだそうです。

被爆3世だからこそ伝えられることがある、と本を書こうとする松永さんの行動が、私はすごいと思いました。

［興村夏帆・祐介記者］

# 二度とくり返してはならない戦争
## ―悲しみのない世界へ―


川口和男さん

学徒動員で造船所での作業中に川口和男さんは原爆に遭いました。その時16歳、退社命令が出て急いで帰り、奇跡的にも無事だった家族と合流。その日は近くの山に野宿しました。山から見た市内は明るかったそうです。夜なのにあちらこちらで火があがっていて明るかったのです。10日の朝は、今思えば放射能を浴びているであろうカボチャを食べてしまいました。避難先まで歩いた道のりは、行けども行けどもまだ肉のついた死体でいっぱいでした。腐った魚のような匂いと、その肉を食べるカラスが頭から離れなかったそうです。

川口さんは原爆が落とされた悲惨さを何枚もの絵にして戦争体験を話して伝えてくれています。絵がとても上手です。川口さんはぼくに核兵器を生産しないことが平和に繋がると教えてくれました。

［芹澤環希・美央子記者］

当時のことを記した川口さんの日記

# 人を救う場所に変わったトンネル
## ―もう作りたくない兵器―

トンネル工場の説明をする松田斉さん

ぼくは、三菱兵器住吉トンネル工場に行き平和推進協会の松田斉さんに話を聞きました。工場は昭和19年頃、魚雷を作る工場を空襲から守るために、岩盤質で幹線道路に近い住吉地区に作られ、動員学徒（13～18歳の男女）が働いていました。原爆落下時、応急手当ての場所となり「赤い背中」の写真で知られる谷口稜曄さん（当時16歳）も逃げ込んだトンネルです。

人を殺すための兵器を作っていた工場が、原爆が落ちたとたん、人を救う場所に変わりました。戦争が起こると外国の人も巻き込んで、夢も希望も無くなってしまいます。ぼくは、核を利用したくないし関係者にもなりたくないと思いました。戦争に勝つことが最優先の時代、兵器を作るためだけに生きた人たちの想いを考えさせられる場所でした。

トンネル工場で作られていたものと同型の魚雷

［木賀真之介・由子記者］

# 写真を通して見えるもの
## ―被爆地の過去と現在―

草野優介さん

ぼくは、長崎平和推進協会写真資料調査部会の草野優介さんに話を聞きました。草野さんは長崎市がアメリカ国立公文書館などから入手した原爆投下後の長崎市の写真を何の写真なのか、場所はどこなのかなどを調べています。取材をした日はたくさんの写真を見せて下さいました。70年以上たった今でも、被爆をした人々はあまりにも悲しく辛い経験を口にすることがとても少ないそうです。ただ、写真を見れば話さなくても当時を想像することができるとのことでした。写真展などで写真を見てもらい、痛み、辛さ、苦しさなどを共感できるきっかけを作っていきたいとおだやかな、やさしい顔で話していました。当時の写真をもっと見て想像したくなりました。

［斎藤昂太郎・佳世子記者］

# 若い世代も未来へつなぐ大切な“ピース”

## 当たり前にある平和への思い

### ―長崎東高の生徒に学ぶ―

県立長崎東高校で作成した英語の平和学習副教材が国連のWebサイトに掲載されました。今回はNo.2を作成した橋本彩華さん、溝口祥帆さんと一ノ瀬憲二先生に話を聞きました。被爆体験談をDVDにして英訳のテロップをつけたこと、国により原爆の取り上げ方が違うことについてディスカッション出来るトピックを掲載したこと、「被爆者の生の声を世界に発信したい」という思いを聞きました。長崎の子どもは当たり前のように平和への思いがあると一ノ瀬先生が話してくださいました。世界で唯一の戦争被爆国である日本人の一人として、ぼくも長崎東高の生徒のように当たり前に平和への思いをもち、少しでも多くの人に平和の大切さを伝えていきたいと思いました。

［木賀 真之介・由子記者］

作成した教材を説明する東高生徒

## 高校生平和大使に聞きました

### ―平和への強い思いを知って―

第21代高校生平和大使の山西咲和さんと徳永雛子さんに、平和大使になろうとした理由や1年間活動していく思いを聞きました。「他県の同級生が8月9日が何の日か知らなかったこと」や「オバマ前大統領来日時の〝核兵器のない理想の世界は現実的にはすぐには難しい〟とのスピーチ」にやるせない気持ちをもっていたことが活動の原点でした。平和大使として、「被爆者の高齢化が進む中、戦争体験のない自分たち若い世代が原爆や戦争の悲惨さ、愚かさを広く伝えることで、核兵器や戦争のない世界の実現に役立ちたい」と言われました。2人の「自分たちで伝えていくんだ!!」という強い思いを知り、ぼくも広島に帰ってから今回の経験や学習を生かして核兵器のない平和な世界について、友達といろいろ話していきたいです。

［温井 颯真・由美子記者］

第21代高校生平和大使の山西咲和さん（左）と徳永雛子さん（右）

## 長崎を知ってもらうために

### ―若い自分ができること―

長崎県立大学国際情報学部4年生の稲田菜那さんは、長崎生まれの長崎育ちです。原爆落下中心地から600mの地点にあった山里小学校の卒業生です。学校では毎年夏になると被爆者の方を呼んで話を聞いていました。平和ウォークという行事では、6年生が被爆地を周り、パンフレットを作って1年生を案内しました。小さなころから戦争の悲惨さを身体で学んできました。去年、この長崎で起きたことをもっと多くの人に知ってもらいたいと、ゼミの仲間でフリーペーパーを製作しました。文だけでなく、QRコードを読み取りイヤホンを接続すると音も聞こえる画期的なものです。被爆者の語り部の声や市内の平和な音が聞こえてきます。ぼくも稲田さんのように平和への活動に貢献できる人になりたいです。

［芹澤環希・美央子記者］

「ながさき平和の音の風景」について説明する稲田菜那さん

## 中高生に平和を伝える活動

### ―パンフレットに思いをのせて―

私はGreen Piecesの泉菜月さんと小野佐也加さん（2人とも大学4年生）に話を聞きました。2人は学生による自主的な平和活動をする中で中高校生向けのパンフレットを作っています。「何で世界に長崎の原爆を伝えたかったのか」を私が質問すると、「伝えたいことは原爆ではない。戦争は当たり前のことができなくなってしまうから、戦争はやってはいけないということを伝えたい」と話してくれました。

私は「長崎は原爆で悲惨な目にあった所」ということがパンフレットで伝えられていると思ったけど、「戦争がなかったら、世界が平和でいられる」という2人の答えを聞いて、長崎の町を守るということだけではなく、みんなの町も守る勇気を感じました。

［興村夏帆・祐介記者］

Green Piecesの泉 菜月さん（右）と小野佐也加さん（左）

「平和な世界を皆で作りたい」と語る、宮崎県の中学生一同
［木賀 真之介・由子記者］

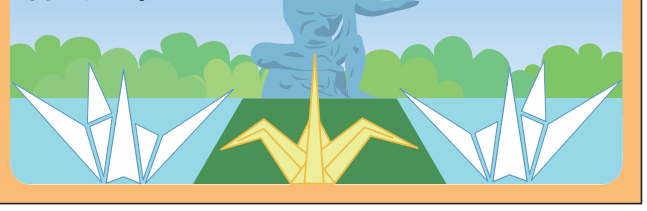
稲佐小学校の平和集会に参加した服部羽奏さん・森本高史さん
［斉藤 昂太郎・佳世子記者］

フランスから核兵器のない世界を祈るルパーモンティエさん
［芹澤 環希・美央子記者］

福島県から中村隼人さん・西内晴久さん・工藤聖央さんの3人
［杉原 編・輝美記者］

## 平和へのメッセージ2018

73回目の「ながさき平和の日」を迎えた今年は、平和祈念式典に出席した方たちに、それぞれの思いをこめたメッセージを書いてもらいました。



# タナカ有美さんに聞きました

## ―5つの心・戦争の伝え方―

ぼくはタナカ有美さんに5つの心を教わりました。タナカさんはニューヨークで戦争と平和について映画を通して伝える活動をしています。その伝え方は5つの方法があります。その5つは、**思いやりの心、愛の心、公平である心、正しいことを正しいと言い悪いことは悪いと言える心、素直である心**です。この5つの心があれば伝えたい人に軽い気持ちで伝わるのではなく、真剣に伝わり聞いてくれます。なのでぼくは、友達に伝えるときは5つの心をもち、真剣に考えながら伝えていき、未来の人々にも戦争はいけないおそろしいことなのだと伝えたいです。

【安田 宗市・和日子記者】

タナカ有美さん

# 核を減らすために できること

## ―依存しない取り組み―

フィリピン共和国の駐日特命全権大使ホセ・C・ラウレルさんに話を聞きました。

大使は、広島・長崎に原爆が落とされたとき、日本にいて2歳でした。9日の平和祈念式典に参列してとても悲しい気持ちになったそうです。

「世界はとても小さく、100年ぐらいしか生きることができないのに、殺し合うのは無駄で悲しいことだと思う」と話されていました。

フィリピンでは、核を持たない取り組みとして、水力、火力、風力などを使った発電に力を入れていると教えてくれました。大使は「原子力発電で電気を作ることは禁止している。原子力発電は事故が起こると多くの人が死んでしまう」と教えてくれました。

私は、核兵器はもちろん、原子力発電も無くしていけるように、核の恐ろしさを周りの人に伝えていきたいです。

【杉原 編・輝美記者】

ホセ・C・ラウレル駐日特命全権大使

# 長崎から世界へとどけ！“平和”のメッセージ

# 長崎を最後の被爆地に

英語講師をしながら朗読ボランティア「被爆体験を語り継ぐ永遠の会」で活動している前川智子さんに聞きました。海外の方に通訳する時はいつもゆっくり話すように気をつけているそうです。文化や歴史が違うので長崎の犠牲ばかりを強調しないように国によって話し方を変えているそうです。一番伝えたいことは「戦争はいやだ」、「長崎を最後の被爆地にしてほしい」とおっしゃっていました。今日は、辻本一二夫さん（被爆当時5歳）が9歳の時に書いた被爆体験記を朗読してもらいました。身の周りの人たちが次々と亡くなっていく様子が想像できて、自分の身に起きたら恐ろしいと思いました。もし核戦争が起きてしまったら、長崎や広島の悲劇から何も学んでいないことになります。前川さんにとって平和とは皆が仲良く信頼し合うことととおっしゃっており、私も世界の人が仲良くして平和が当たり前のようになってほしいです。

【中山 華・要美記者】

前川智子さん

外国人観光客に英語で朗読をする前川さん

# 見えない恐怖との戦い

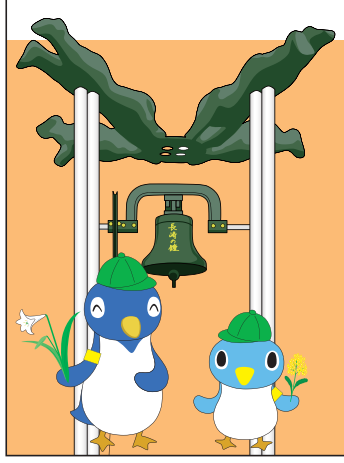
## ―吉田睦子さんの話を聞いて―

長崎原爆資料館で吉田睦子さんの話を聞きました。吉田さんは被爆者ではありませんが、交流証言者としてボランティア活動をなさっています。交流証言者とは平均年齢82歳を超えた被爆者に代わって体験談を語り継いでいく人たちです。被爆者は、原子爆弾の影響を受けていないと思っていた無傷の人もいつ病気になるのか見えない恐怖と戦っていること、被爆者と言うだけで差別があったそうで体験談を話すのはとても勇気がいること、また、次世代に証言を続けていくことが大事だということを話してくれました。「いじめや戦争も自分の身に起ったらと常に考えて」という言葉が強く胸に残りました。

最後に吉田さんは「自分の気持ちが自由に言えることが平和だ」とおっしゃっており、私もそんな平和が続いてほしいと思いました。

［中山 華・要美記者］

吉田睦子さん

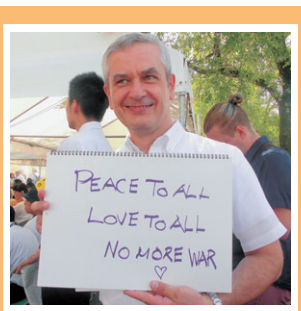


広島県呉市から、「世界に平和を」と願いを込めて。及川陽香さん
［中山 華・要美記者］

「未来の子供達に平和を」と語る長崎市藤丸さん・指方さん
［安田 宗市・和日子記者］

祈念式典に訪れ、「長崎から平和を」と語る新潟県の高校生5名
［山中 里紗・亜由美記者］

長崎から「人類の世界平和」を願う太田加津彦さん
［温井 颯真・由美子記者］




イギリスから「全てに愛と平和を」と語るリチャードさん
［興村 夏帆・祐介記者］

# 下と終戦から73年目の夏。

## “戦争”と考えた“平和”

## 記者がしました。

1）戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと、
2）あなたの住む地域にある平和資料館等を訪ねて学んだこと、
3）あなたの住む地域で平和を伝える活動をしている人に会って学んだこと、
4）家族で考えた「平和」について。

このコーナーでは、おやこ記者のみなさんが生まれ育った地域で戦争の痕跡を調べ、あらためて学び考えた平和についてのリポートをご紹介します。（編集部）

### 福島県 いわき市　芹澤 環希・美央子 記者

お話をする鈴木福二さん

## 戦争中に送った小学校（国民学校）生活を聞いて

楽しい小学校生活を送っているぼくには想像できない辛い戦争時代のお話でした。父の知り合いの鈴木福二さんは、昭和8年生まれで、小学校（国民学校）6年生の時に終戦を迎えました。当時の生活は、食べ物も着る物もなく、配給されてもイモや葉っぱばかりで毎日お腹が空いていたそうです。敵の攻撃が激しくなると、電球にふろしきをかぶせ、部屋の灯りを隠して息も静かにしていたと話してくれました。ランドセルを背負った記憶はなく、近所のお兄ちゃんが戦争に行ってすぐ死んだと聞かされたそうです。鈴木さんは、無差別に人を殺し、人間をゴミのように扱う戦争は二度としてはいけないと教えてくれました。

ぼくは、今友達がたくさんいて家族と笑ってくらせることに、感謝したいと思いました。何よりも平和が大切なのです。

### 北海道 帯広市　杉原 編・輝美 記者

## 知らなかった戦争被害

私設博物館「昭和ナツカシ館」を訪ね、参納弘義館長（78）にお話を聞きました。昭和15年生まれの参納さんが4歳の時に、お父さんが戦地（中国）に行きました。昭和20年7月の帯広空襲のあとに、国の命令で「強制建物疎開」があり、参納さんの家をはじめ多くの家やお店が壊されて補償もなかったそうです。

参納さんは昭和時代の帯広を伝える活動の中で、このような戦争被害についても多くの人にお話ししています。当時使われていた、空襲を伝えるメガホンも見せてもらいました。

私は自分の住む街にも爆弾が落とされたことを初めて知ったので驚きました。そして、戦争は残された家族も辛い思いをするということを知り、平和が続いて欲しいと思いました。

参納弘義館長と空襲を伝えるメガホン

### 新潟県 妙高市　木賀 真之介・由子 記者

間島英夫さん（右）

## 記憶に残そう４つの日

ぼくは妙高市非核平和都市事業実行委員長の間島英夫さんに話を聞きました。

話のなかで「日本全国民が忘れてはいけない4つの日」が一番印象に残りました。沖縄終戦日（6月23日）、広島原爆投下の日（8月6日）、長崎原爆投下の日（8月9日）、終戦の日（8月15日）です。戦争の苦しさ、辛さ、命の大切さを次の時代に伝えていくことが使命であり戦没者への供養だと教えていただきました。そのために、平和の鐘事業や戦争体験者のDVD作成、また戦争の本も制作したいと、間島さんは戦争記事の切抜きを収集しているそうです。

ぼくも平和や戦争について勉強して皆に伝えたいと思いました。

### 東京都 武蔵野市　斉藤 昂太郎・佳世子 記者

## ゼロ戦などの軍用施設への空爆

ぼくが住む町の空爆を調べるため「武蔵野市ふるさと歴史館」に行きました。公文書専門員の高野弘之さんにお話を聞きました。

ゼロ戦などのエンジン生産施設だった中島飛行機武蔵製作所への爆撃は9回もありました。最初の爆撃は昭和19年11月24日でした。B29は初めの頃は高い所を飛んでいて製作所への狙いが定まらず、周辺の一般住宅もたくさん被害がありました。

歴史館には1トン爆弾の実物大模型があり、大きさにびっくりしました。こんな大きいものが空から沢山落ちて来たら本当に怖いと思いました。

現在11月24日は、戦争の悲惨な歴史と平和の大切さを未来に伝えるため、「武蔵野市平和の日」になっています。

軍需工場の進出と爆撃被害についての説明板（写真上）
1トン爆弾の実物大模型（写真下）

# 広島・長崎原爆投
# 私たちのふるさとで調べた
## 全国9組18名のおやこ
## それぞれの地域を取材

あの日。1945（昭和20）年８月９日の原爆投下から、長崎は73年目の夏を迎えました。今年の日本非核宣言自治体協議会（非核協）主催のおやこ記者募集には、全国から170組の応募があり、抽選で選ばれた9組18名が参加することになりました。

おやこ記者のみなさんは、長崎での取材に先がけて、それぞれの地域で「平和」について考え事前取材をしました。今回は次の４つのテーマからひとつを選択し、記事にまとめています。

**大阪府 高槻市**　興村 夏帆・祐介 記者

朝日悦子さん

### 諜報員として被爆した方の娘さんからお話を聞いて

私は、読み聞かせボランティアの朝日悦子さんから、朝日さんのお父さんの話を聞きました。

お父さんは、諜報員として配属された広島の部隊で原爆に遭いました。周りの兵士は、被爆した市民に水をあげていたのに、自分だけが生き残るよう特殊な教育を受けていたため、水をあげることができなかったそうです。その後悔があったのか、お父さんは原爆の式典のニュースなどは見たがらず、原爆に関する番組では「こんなもんではないよ」とつぶやいていたそうです。

この話を聞いて戦争はテレビや文章だけでは表せない後悔や恐ろしさがあるのだと知りました。

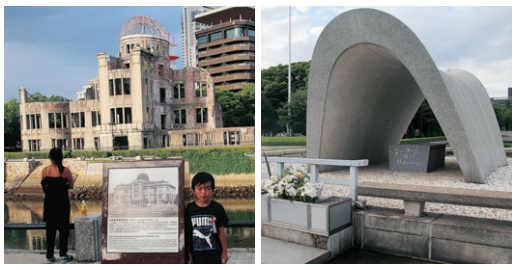
朝日悦子さんのお父さん（中央）

**広島県 廿日市市**　温井 颯真・由美子 記者

「広島」に住んでいるからこそ行くべき場所であり、記憶に留めておきたく、両親といっしょに広島平和記念資料館を訪れました。

ぼくが分かったことは３つあります。１つ目は原子爆弾の強さで、ガラスビンがドロドロに溶けるほどの熱さだったことです。２つ目は原爆ドーム近くに「T」の形をした相生橋があり、飛行機から分かりやすいので、そこを目標に原子爆弾が投下されたことです。３つ目は14万人以上の人が亡くなり、この数はぼくの住んでいる廿日市市の人口より多くの、ぼくたちのような普通の人が一発の原子爆弾で犠牲になったことです。

ぼくは原子爆弾の怖さを知り、二度と戦争をおこしてはいけないと、強く思いました。


広島平和記念公園内に設置された原爆死没者慰霊碑（写真右）と原爆ドーム（写真左）

### 広島平和記念資料館を訪れ学んだこと

**高知県 高知市**　山中 里紗・亜由美 記者

私は、高知で生まれて高知で生活しています。近くには、緑の多い大きな公園があり、ベランダからは、海が見えます。平和でキレイな街です。

小学校高学年くらいから、戦争について学び始めましたが、高知にも大空襲があったことを知り、大変びっくりしました。

私は覚えていませんが、お母さんが言うには、私が７歳の頃、おばあちゃんにもらった本に、戦争のことが書かれてあって、それを読んだ私は、お母さんに「ママ、何があってもママを守るからね」と言ったそうです。お母さんは、その時私を安心させるために「戦争は、終わったから大丈夫」と言ったそうですが、本当は、世界のどこかで戦争は続いていると思ったそうです。

私は、日本だけではなく、戦争のない平和な世界をみんなでつくる必要があると思います。

私（里紗）と母（亜由美）

### 平和な世界

**宮崎県 日向市**　安田 宗市・和日子 記者

ぼくは、日向市役所に勤務する緒方博文さんに案内してもらい、日向市立富島中学校の校門にある旧基地司令部門や、協和病院内に残る昭和20年に落とされた爆弾の穴と滑走路を見学しました。

富島中学校（の建つ場所）が当時の海軍富高航空隊のパイロットの学校です。九十三式中間練習機に２５０kgの爆弾を積み、隊員は敵を倒すために、ここから特攻隊として沖縄県に向かって行き、たくさんの人の命が犠牲になったことが、ぼくは一番恐ろしかったです。

そして、協和病院には、爆弾によってあいた直径12m、深さ３mの大きな穴が残されていました。それを見るとぼくの体はぞっとしました。

緒方さんは、「戦争は恐ろしいものであるが、その証拠となる戦争遺跡を残すことなどをしなければ、未来の人は、戦争があり大勢の方々が亡くなったということが分からない」とおっしゃいました。

ぼくは未来の世界が平和だといいなと思いました。

富島中学校校門（写真右）
緒方博文さんと
爆弾の痕の穴（写真左）

### 悲しい戦争

**沖縄県 沖縄市**　中山 華・要美 記者

私は、糸満市にある沖縄県平和祈念資料館で原田直美館長からお話を聞くことができました。印象に残ったことは「戦争とは人間を人間でなくしてしまう」という話です。

戦争中、道ばたで老人が倒れ助けを求めていても誰も見ぬふり。それは、助けたくても自分自身が生きていくのに必死だったからです。人の命だけではなく人間としての感情や大切なものが失われていくのが戦争なのです。

そして沖縄が復帰した１９７２（昭和47）年から現在まで２０１５トンの不発弾が見つかったと聞きおどろきました。資料館にもとても大きな不発弾が展示されていました。

「ご飯が美味しい！」や「家族がいる」など、日常の小さなあたりまえの幸せが平和だと改めて気づくことができました。戦争はどんな理由でもやってはいけません。そのためには世界中の人と優しい気持ちで話し合いが必要だと思います。

原田直美館長（左）

### 戦争とは人間を人間でなくしてしまうこと

# 編集後記

## 事務局だより

「親子記者事業」は今年で第11回目を迎えました。今号では、被爆者の声や被爆の実相を如実に伝える被爆遺構、若い世代による被爆の継承や平和発信の取り組み、被爆地の平和への祈りについて取材しました。取材にご協力いただきました皆さまに御礼申し上げます。

おやこ記者新聞を通して被爆の実相や平和の祈りを知り、感じていただくことで、一人でも多くの方の心に「平和の種」を広げることができれば幸いです。

濵田　興樹

**北海道 帯広市**　杉原 編・輝美 記者

### 心に残る経験

長崎で親子記者として取材した中で、平和を伝える活動がとても多く、たくさんの人が携わっていることを知りました。フィリピンのホセ・C・ラウレル大使やおきあがりこぼし展の内田さんの平和に対する思いがとても心に残りました。私も世界の人が楽しく平和に生きていけるように自分にできることを考えていきたいです。

**福島県 いわき市**　芹澤 環希・美央子 記者

### 長崎の人々の強さと想い

「核兵器を持っている国が強いんじゃない。平和を守れる国が本当に強い国なんだ。」と言った息子にたった4日間でしたが成長を感じました。平和の尊さも改めて身にしみました。（芹澤 美央子記者）

原発のある地域に住んでいるぼくは、今回放射能があとになって病気を引き起こし、人々を苦しめる恐ろしさも学びました。戦争は絶対にしてはいけないと思いました。（芹澤 環希記者）

**東京都 武蔵野市**　斉藤 昂太郎・佳世子 記者

### 平和の大切さ

長崎に来て平和について学びました。稲佐小学校に取材に行き「戦争は人殺しの道具」の言葉が印象に残りました。自分がすぐに出来ることは、お友達と仲良くしてけんかをしても仲直りするように努力する事です。東京に帰ってお友達に原爆や戦争のことを伝えたいです。これからも平和について学習していきます。

**新潟県 妙高市**　木賀 真之介・由子 記者

### 長崎に来られて良かったです

長崎に行き平和の勉強をし、三菱のトンネル、一ノ瀬先生や高校生平和大使の人に話を聞きました。平和の大切さは口で言って理由が話せなかったけど、長崎という被爆地に来て「平和」と「戦争」の大きな違いを知り、平和の知識が身に付いて、未来に向けて伝えたいと思いました。

**大阪府 高槻市**　興村 夏帆・祐介 記者

### 今伝えていくことの大切さ

私は、この4日間で、原爆・戦争体験者にたくさん話を聞かなければならないと感じました。なぜなら、最近、原爆・戦争体験者が高齢になっており、話をできる人が少なくなってきているからです。そのため、戦争体験者の話を今のうちから聞き、みんなに平和の大切さを伝えていきたいと思います。

**広島県 廿日市市**　温井 颯真・由美子 記者

### 親子で平和広めたい

戦争を体験していなくても自分ができることで戦争や核兵器のない世界に役立てることがわかりました。原子爆弾は一発で多くの命が亡くなり悲しいです。学校の平和学習の時には、進んで今回の経験をみんなに伝えたいです。（温井 颯真記者）

長崎で多くの方々の平和への想いに感銘を受けました。大変貴重な経験をさせていただいたことを決して忘れず、広島に帰っても息子と共に伝えていきたいです。（温井 由美子記者）

**高知県 高知市**　山中 里紗・亜由美 記者

### 世界の平和

この取材を通して平和の尊さや命の大切さを改めて考えることができました。平和祈念式典に参列し、世界中の人々が平和を望み、長崎が最後の被爆地になることを願っていることに同感しました。8月9日11時2分に黙とうをさせていただき、73年前の悲劇を二度と繰り返してはいけないと思いました。

**宮崎県 日向市**　安田 宗市・和日子 記者

### 原爆を伝えることの大切さ

今回の親子記者で原爆のおそろしさをすごく感じ、伝える仕事はとても大変だと分かりました。現在被爆者の平均年齢は82歳で、伝える人が年々少なくなっています。だから、ぼくたちの世代が勉強をしていき、同じ過ちがないようにしていきます。そしてタナカ有美さんに教わった「5つの心」を心がけていきたいと思います。

**沖縄県 沖縄市**　中山 華・要美 記者

### 長崎に来て感じたこと

学校の平和学習では沖縄の地上戦のことしか習わなかったので、長崎に来て原子爆弾の恐さを知りました。73年経った今も、見えない恐怖と戦っている人たちがいます。その原爆の恐怖を次世代に伝え平和を切実に願う、長崎の世代を超えた熱い想いを肌で感じました。世界中から戦争をなくすべきだと思います。

## 学生ボランティア16名がおやこ記者を全力サポート！

今年度も、長崎県立大学シーボルト校情報メディア学科・国際社会学科の金村ゼミ生16名に学生ボランティアとして、おやこ記者9組の取材と記事作成・編集をサポートしていただきました。

（写真上段 右より）

♥自ら平和について考え、発信することの大切さを感じた。＝伊東　美奈＝

♥平和を考え、伝えていくことの大切さを実感することができた。＝稲田　菜那＝

♥再発見、新発見があり、とてもいい時間を過ごせました。＝内田　千裕＝

♥式典に参列し、平和について改めて考えさせられました。＝木須萌奈未＝

♥若い世代が被爆体験を学び、発信する大切さを感じた。＝仙崎美佳里＝

♥おやこ記者をきっかけに平和の種が各地に広がり、育つことを願います。＝廣庭　佳奈＝

♥私が伝える、私たちが伝える。この意識を持ち続けます。＝山﨑　千尋＝

♥平和への思いはみな同じ。自分の心と向き合えました。＝前田　真理＝

（写真下段 右より）

♥親子の熱心な姿勢に私も学ぶところが多くあった。

［枠外］＝松川　楓花＝

♥平和が次の世代に受け継がれる貴重な瞬間に立ち会えた。＝倉富　美優＝

♥1つの親子から平和の輪がつながるって素敵だと思った。＝天水鈴乃音＝

♥長崎に縁がある者として、平和発信を続けていきたい。＝長尾　瑞希＝

♥長崎で平和について学べたことは一生モノだと感じた。＝山﨑　優＝

♥多くの方に記者と長崎の想いが届きますように。＝酒井つゆみ＝

♥改めて自分も平和について勉強し直すことが出来た。＝瀬戸口菜那＝

♥親子のサポートに伴い、自身の学びにも繋がりました。＝興那城　槙＝